

サッカーにおける選手選抜過程の解明

—ジュニアユースからユースへの選手選抜に着目して—

Clarification of player selection process in soccer

: Focusing on the selection process in junior youth athletes promoting to youth athletes

田村 達也／並木 伸賢／宮崎 純一

Tatsuya TAMURA / Nobutaka NAMIKI / Junichi MIYAZAKI

I. 序論

サッカー競技は、陸上競技などの測定スポーツと比較し、競技パフォーマンスを数値化し客観的に評価することが難しいスポーツである。サッカー競技で要求される競技パフォーマンスは、テクニック（技能）、戦術、心理的要素および体力的要素の全てが関与しており（バングスポ・モア, 2015）、日本サッカー協会（以下、「JFA」と略す）が発行した指導教本（JFA, 2012）でも類似した指標が提示されている。これまで、サッカー競技における競技パフォーマンスは、上述した要素を個別に取り出し、検討されてきた（Ali, 2011; Ivarssona et al., 2020; Wachsmuth et al., 2023）。これらの要素の中でも体力的要素については、数値化することが可能であり、テクニック（技能）や心理的要素と比べて客観性の高いデータを収集することが可能であるため、国内外で多くの研究成果が報告されている（Drust et al., 2007; Gil et al., 2007; 田村ほか, 2021）。しかし、テクニック（技能）、戦術、心理的要素については、数値化することが困難であるため、スキルの測定方法や心理的競技能力を測定するなど、研究成果は限定的である。これらの研究成果は、「各要素の水準が高い＝能力の高い選手」であることを科学的に示し、選手個人の能力について、選手の視点から評価されるものが多く実施されてきた。実際、これらの能力を高い水準で保持することが、将来的なプロ選手のキャリアを歩む可能性を高めると考えられる。しかしながら、必ずしも「能力が高い選手」が、その後のプロ選手のキャリアが切り拓かれるとは限らない。実際、日本のA代表の選手においても高校生年代から直接プロ選手のキャリアへ進めず、大学を経てプロ選手のキャリアを歩み日本代表に選出される選手も多数みられる。実践現場において、選手のパフォーマンスについて統一的な見解はなく、個々の複合的な能力を踏まえて選抜されることが主流である。つまり、要素還元論的に選手の競技パフォーマンスを評価することには限界があり、より個別の事例に基づく選手選抜の過程を明らかにする必要があるといえる。

選手選抜については、「チーム内の集団からレギュラーメンバーを選抜する」、「アマチュア選手からプロ選手（Jリーグクラブのトップチームに所属する選手）を選抜する」を代表例として、さまざまなパターンが存在する。中でも、「アマチュア選手からプロ選手への選抜（あるいは昇格）」は、その時々々のトップチームの状況（補強ポイントなど）や監督が志向するサッカーの影響が強く反映されてしまう可能性がある。そのため本研究では、できる限り選抜選抜に必要とされている要素以外の影響を排除するため、「ジュニアユース（中学生年代）からユース（高校生年代）への選手選抜」に焦点をあてる。Jリーグクラブは、トップチーム以外にアカデミーと呼ばれるU-10～U18各年代のチームを所有することが義務付けられており、ジュニアユースとユースに分かれていることが一般的である。近年では、有望選手が各Jリーグクラブアカデミーに集まる傾向が顕著であり、自らのアカデミーで選手を育成し、トップチームに輩出することを目標に掲げるクラブは多い。特に、ジュニアユースからユースへの選抜では、少なくとも近い将来に、トップチームへの昇格を果たす選手が含まれる可能性が高く、日本においてはクラブ育成の主要段階と位置づけられる。そのため、選手個人の能力について検討されると同時に、クラブの哲学（フィロソフィー）を支える基盤となる選手の選抜がなされると考えられる。このように、自らのアカデミーで選手を育成し、トップチームに輩出することは、クラブの文化的存在意義を高めるだけでなく、トレーニング補償金、連帯貢献金といった制度により、選手移籍の際に得られる金銭的メリットも非常に大きい（日本サッカー協会, 2024）。つまり、「ジュニアユースからユースへの選手選抜」はクラブにとって非常に重要なフェーズであると考えられる。

しかしながら、個別の要素を取り出して選手の能力を評価するのではなく、複合的な観点から選手をどのように選抜しているのかは未だ解明されていない。さらに、選手選抜は現場の指導者（監督・コーチ）によって行われることが一般的であり、ユースに選抜（あるいは昇格）する選手を最終的に評価・判断する立場にあるスタッフ（アカデミーダイレクター）を対象とした研究は渉猟しえた限り見当たらない。そこで本研究では、サッカーのJリーグクラブにおいて選手選抜の権限を有しているスタッフを対象に、ユースへの選抜（あるいは昇格）過程の実態解明のため、インタビュー調査を行い、選手選抜過程の一資料を得ることを目的とした。

ユースへの選抜（あるいは昇格）の過程を事例的に示すことで、どのような観点から選手選抜がなされているのか、選手や指導者にとっては高めるべき能力やスキルについて示唆できるという点で意義がある。また、本研究を基礎資料として、サッカー以外の競技における選手選抜方法の一助となるだけでなく、本邦におけるより良い選手選抜方法の発展に寄与することを期待する。

Ⅱ. 方法

1. 対象者

Jリーグクラブに所属し、上位カテゴリーへの選手選抜（ユースへの昇格・選抜）の権限を有しているスタッフ3名を対象とした（表1）。本研究では2クラブを対象とし、調査は2023年2～3月に実施した。

表1 対象者の人数・役職・所属クラブの特徴

対象者の所属クラブ	A	B
対象人数（名）	1	2
対象者の役職	アカデミーダイレクター	アカデミーダイレクター ヘッドオブコーチング
対象者の所属クラブの特徴 （所属リーグ/ホームタウン）	J1リーグ所属 政令指定都市	J2リーグ所属 地方中核都市

2. データ収集

対象者自身の認識を重視するため、個別性の高い広範囲な回答が得られることが重要であることから、調査は1（インタビューイ）対2（インタビュアー）あるいは2対2の半構造的、深層的、自由回答的インタビューにより実施した。インタビューは著者が指定した施設内あるいはZoomを使用したオンライン形式で行い、平均時間は約65分であった。

インタビューに先立ち、北村ら（2005）の先行研究を参考に、①対象者の体験や認識について幅広く回答が得られるような基幹的質問（main question）、②語られたテーマ、意味、考え等についてその意味をより明確にさせる追跡的質問（follow-up question）、③語られた内容に的を絞って更に深く掘り下げる探索的質問（probes）、の3種類を組み合わせたインタビュー・ガイドを作成した。

インタビューに用いた質問項目は、研究の目的に沿った対象者の体験や認識について幅広く回答が得られるように基幹的質問として以下の4つを設けた。

- 1) 普段の活動内容、選手・チーム・クラブとの関わり
- 2) 育成・強化にあたって大切にしていること・考え方
- 3) 昇格選手の選抜の方法・過程
- 4) 外部スカウト選手の選抜の方法・過程

対象者には、インタビューの概要を理解してもらうため、予め基幹的な質問項目を提示した。インタビュー当日は、原則としてインタビューガイドの質問項目に沿いつつ、インタビューの流れに応じて対象者の知見を具体的、深層的に明らかにするため柔軟に変化させながらインタビューを行った。インタビューは、主に第2著者（臨床心理士・公認心理師の資格および臨床心理学に関連する修士号を有し、スポーツ心理学の質的研究の経験を有する）が行い、第1著者は補足する事項がある場合に適宜質問を行った。インタビュー内容は対象者の承諾を得た上で、音声でICレコーダーに録音した。

3. 倫理的配慮

インタビュー調査を実施するにあたり、文書により本研究の内容、得られたデータは本研究以外では使用しないこと、研究成果の公表時は個人が特定されないように匿名性を確保すること、データの保管には細心の注意を払い研究終了後は速やかに破棄することを説明し、対象者の自由意思によって回答を得た。データの使用に関しては、同意書への署名をもって研究に同意したものとした。なお、本研究は青山学院大学教育人間科学部附置教育人間科学研究所から助成金を得て実施した。

4. 分析方法

本研究では、Jリーグクラブのジュニアユースからユースへの昇格過程について明らかにすることを目的としていることから、(1) 昇格のプロセスと、(2) 昇格に対する考え方・視点の2点から整理を行った。まず、(1) 昇格のプロセスに関しては、インタビュー調査を踏まえてインタビュー対象者の役割・立場から生じるイベント・出来事について時系列に沿ってまとめた。(2) 昇格に対する考え方・視点においては、Aクラブ、Bクラブにおいて、それぞれKJ法に基づく分析を行い(川喜多, 1967)、最後に比較・統合を行った。理由として、AクラブおよびBクラブのクラブの規模、地域性、選手数・スタッフ数、チームの掲げる目標や立ち位置が異なり、双方の回答から共通項を探てしまうと、他チームや選手・指導者にとって意義のある結果を見出すことが難しいと考えたからである。そのため、個別の事例を取り上げてKJ法を実施し、その後共通項を見出すこととした。KJを用いることで、自由回答から得られたデータの意味とその関係を見出すことができると考え、方法は先行研究を参考とした(宇野, 2019)。作業は、臨床心理士(心理学の修士号を有しスポーツ心理学の質的研究の経験を有する専門家)1名とコーチング学を専攻する大学教員1名の計2名で行った。なお、小カテゴリー、中カテゴリー、大カテゴリーは順に、〈 〉、《 》、【 】で示した。

本研究では、自由回答をカードに記述する手順を省き、意味のある回答をMicrosoft社のExcelに入力しテキスト化した(第1ステップ)。テキストが長い場合は、それを意味ごとに適切な長さに単位化し、それぞれの個別のテキストとして入力した。

次に、テキスト化された内容の意味について、作業間で確認、共有し、共通理解が得られるまで吟味、協議した。その後、意味が類似していたテキストを小カテゴリー(〈 〉と表記)としてまとめた。この段階までは個別のチームにおいて分析を実施した。続いて、親和性の高い小カテゴリー同士を中カテゴリー(《 》と表記)とし、両チームにて対応する形で表現を調整した。

さらに中カテゴリー同士を大カテゴリー(【 】と表記)としてまとめ、グループ編成を行った(第2ステップ)。その際、どのカテゴリーにも所属しないと考えられたものを省かず、無理にグループに編成しなかった。また、選手選抜の考え方・視点に関連のない内容は分析から除外した。

最後に、関係があると見なされた大カテゴリーあるいは中カテゴリー同士を空間配置した。空間配置の作業の中で、グループ編成が合理的でないことが判明した場合は、グループ編成を再検討した。図解化の際、多角的・重層的に矢印や囲いなどさまざまな記号を用いた。

Ⅲ. 結果

選手選抜過程の時系列を図1、2に示した。ジュニアユースからユースに昇格する選手を視る機会（以下、「内部選手を視る機会」と略す）と他のジュニアユースチームあるいは中体連からユースに選抜される選手を視る機会（以下、「外部選手を視る機会」と略す）の2つの視点からまとめた。

調査およびグループ編成の結果を表2、3に示した。調査では、選手選抜の考え方・視点に関連のない内容を除き、全てで118個の回答が得られた。それらの回答をテキスト化し、グループ編成を行った結果、〈トップチーム、世界で活躍する選手の育成〉といった小カテゴリーは、合計36個（チームA:20個、チームB:16個）であった。続いて、小カテゴリーを集約したところ《選手を観る視点》といった各クラブに共通する8個の中カテゴリーを得た。さらに、中カテゴリーを集約した結果、【クラブの意向・哲学に応じた選手評価の設定】、【選手選抜に関する考え方】という2つの大カテゴリーを得た。

グループ編成に基づき、選手選抜に対する考えのプロセスについて図解化を行った結果を図3、4に示した。Aクラブ・Bクラブともに【クラブの意向・哲学に応じた選手評価の設定】および【選手選抜に関する考え方】が双方向的に影響を及ぼし合いながら選手選抜に繋がることが明らかになった。【クラブの意向・哲学に応じた選手評価の設定】では、《クラブの意向・哲学》に応じて《哲学に合わせた評価基準の作成》を行っている。また、Aクラブにおいては、指導者・コーチの配置や彼らとのコミュニケーションにおける工夫も必要とされていた。【選手選抜に関する考え方】においては、《育成に対する考え方》を基盤として《選手を視る観点》および各育成年代に対する考え方を踏まえた上で、各クラブの状況や特色に応じた《選手選抜に対する考え方》が形成されていることが明らかになった。

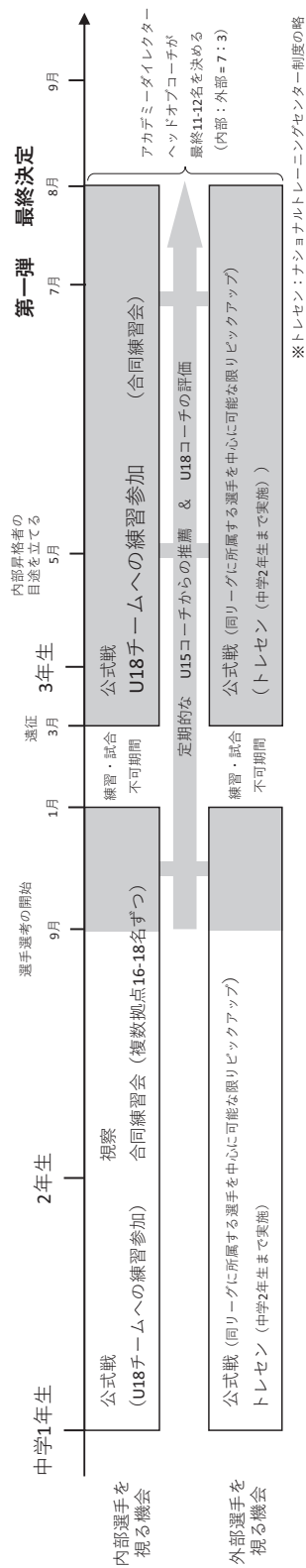


図1 Aクラブ (J1・政令指定都市) のU18選手決定のプロセス (灰色部分は本格的な選考開始を示す)

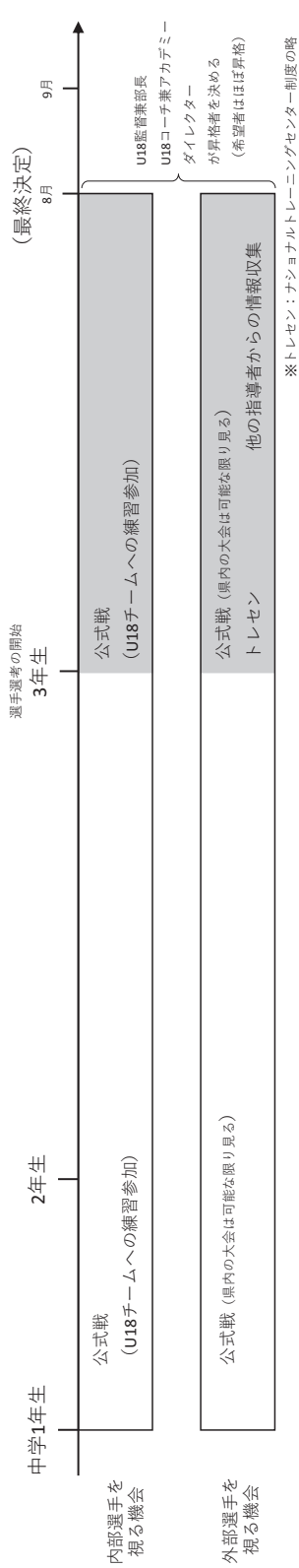


図2 Bクラブ (J2・地方中核都市) のU18選手決定のプロセス (灰色部分は本格的な選考開始を示す)

表2 Aクラブ（J1，政令指定都市）におけるKJ法の結果

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	ラベル・要約
クラブの意向・哲学に 応じた選手評価の設定	クラブの意向・哲学	トップチーム、世界で活躍する選手の育成	トップチーム、世界で活躍する選手の育成 プロになりトップチームで活躍、トップチームが強くなる
		クリエイティブな選手の育成の要求	クリエイティブな選手の育成をクラブから求められる
	指導者・コーチの配置の工夫	クリエイティブな選手を育成できる指導者の配置	クリエイティブな選手の育成に携われる指導者を選ぶ サッカーを教えられる指導者を求める
		指導者の特徴のバランスを取る	教育的な指導が苦手な指導者が増えてきた 全て教育的な指導者である必要はない 教育者、元プロ選手、アカデミー出身者のバランスを取りながら指導者を選ぶ
		哲学に合わせた評価基準の作成	ポジション毎に求められる要素の明文化
	指導者・コーチとのコミュニケーション	指導者による評価の差異が生じる	上位45人は全員納得するが、他は指導者によって異なる 評価が指導者によって異なる クラブが求めているものと異なるという意見は伝える
		意見を聞いたうえで最終決定を下す	意見を聞き取った上で後日決定を通知した プロセスとして指導者の意見を聞き取ることが大切 皆が意見を出して、最終決定はヘッドオブコーチとアカデミーダイレクターで決定する
	選手を視る視点	ストロングポイントを持つ	ストロングポイントを持っていること 技術、フィジカル、インテリジェンス、リーダーシップなど
		数年後を見据えた選手の選抜	強みを持つ選手の数年後を見据えて獲得する 3年後のユースチームをイメージする
		地域出身の選手を大切にしつつ強みを活かす	地域内によっても選手の特徴が異なる 地域の出身選手を大切にする一方で多様性も求める
選手選抜に関する考え方	選手選抜に対する考え方	U18の育成の強みと合うか	どこを育てるのが得意なのか 上手くは出来るがタフには出来ない 他でプロ選手になった選手もいるが、うちでは育てられなかったと思う 少し下手な選手の方が育てられる その時のユースの指導者によって異なる トップチームの指導者によっても必要な選手が変わってくる
		内部昇格だけでなく外部選手も取り入れる	内部昇格者のみの方が調和がとりやすい チームとしての成熟度は高いが個人に課題が出てくる 迷ったときは外部選手を入れるようにしている
	育成に対する考え方	自分の課題に向かい挑戦するプロセスを学ぶ	なぜ取り組むのかを自分事に落とし込んで理解させる 自分に課しているタスクに挑戦し新しいタスクを見つけるサイクルに取り組む 結果目標よりも成長目標で考え、自分に課すタスクがうまくいくことが成功
		チームでの経験で人生が豊かになる	サッカーを通じて人生が豊かになったと思ってほしい プロになったかどうかだけでは全て失敗 皆人生があり、社会に貢献しようとしているプロセスが大切
	U18以上の環境に対する考え方	試合環境が必ずしも良くない	世代トップのリーグに所属していないことも問題としてある 日本の中心から遠い 天候の影響を受ける 移動にお金がかかる 試合環境に左右されない選手を育てる必要がある 地域の特殊性によりリーグ戦を設定することが難しい 情報がない
		内部：外部のトップチーム昇格は5:5	プロ選手になったのは50%ずつ Jリーグ全体で個人に焦点が当てられてきている
		トップチームとのギャップがある	トップチームのレベルが上がり過ぎて選手が上がりれなくなった チームとして結果が出ていないし、選手もトップチームに上がれていない問題が出てきた 大学に行かせても試合に出られないことが多かった 大学サッカーの環境も大きく変化している
	U15世代の育成（環境）に対する考え方	挫折経験が選手を成長させる	挫折してもがいてを繰り返した選手の方が、その後のスキルや行動力、他者への影響力が高い 伸び率が内部選手と異なる、内部選手は高校生まで将来を具体的に考えずに過ごしてしまいがち
		勝利よりもプロセスに焦点を置く（結果、勝ちに弱くなってしまった）	プロセスに焦点を置き過ぎた結果、勝ちに弱くなった 勝つことを目指して自分のゲームモデルがある ゲームモデルを追求するから勝たなくても良いのではなく、これが勝ちにつながる 大会の結果よりも選手の成長と言いつつ スタッフへの評価も大会の結果ではなかった クラブも同様の考えだった
		中学年代で外部に所属することのデメリットもある	指導者や試合環境として中学年代で外部に出て伸びる選手は少ない 1-2年生から試合に出られることで成長する場合もある

表3 Bクラブ（J2，地方中核都市）におけるKJ法の結果

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	ラベル・要約
クラブの意向・哲学に 応じた選手評価の 設定	クラブの意向・哲学	トップチームへの昇格が地域を活性化させる 前に速くアグレッシブにプレーする	トップチームに昇格させること 良い選手を輩出することでチームが活性化し、地域が活性化し、好循環を生み出す 前に進み続ける 前に早くスピーディーにアグレッシブにプレーできる 他チームのスタイルと異なるサッカーをしている ボールを持ったから少ない手数で相手のゴール前まで持っていく特徴がある
	哲学に合わせた評価基準の作成	ポジション毎の要素の明文化の試み	チームの哲学に合わせた評価基準を現在作成している チームのプレースタイルに合わせて評価項目を作成している スポーツダイレクターや強化部長と話しながらポジションごとに求められる要素を定める ポジション毎に求められる要素が異なる
選手選抜に関する 考え方	選手を視る視点	特徴のある選手	平均値よりも特徴があることも重要 特徴がないとプロ選手になれないと思う
		チームに対する思いの強さ	クラブに対して熱量がない 口だけではなく行動出ているかを評価する クラブへの愛・プライドを持って欲しい
	技術、フィジカル、メンタル、社会性	技術、フィジカル、メンタル、社会性	技術、フィジカル、メンタル、社会性の観点から選手を視る 欲を言えば全て持っていて欲しい 身体能力は考慮するがU13時点でリクルートしているのでそこまで悪い選手は少ない 技術のみでの評価はしない、そもそも技術が非常に高い選手はそこまで多くない スピードやメンタリティーを評価することの方が多い
		学校、家庭など、選手を取り巻く環境	学校での生活態度 急な外見の変化を見て、生活からのパフォーマンスへの影響を考える サッカーだけではなく改善しない 幼少期の過ごし方、学校生活、家族関係の背景を知る 選手がどうしようもない問題をコーチが解決する
	選手選抜に対する考え方	他クラブでの指導による影響	外部出身でも他クラブからの場合は指導しても変わらないことも多い U12での指導によりクラブの色がかなり入っている
		内部昇格者のポジションに応じた外部選手の獲得	内部昇格者がいない場合に外部から獲得する 志望する選手が多くない
	育成に対する考え方	良いパーソナリティを持った選手、社会に貢献できる選手の輩出	良いパーソナリティを持った選手を発掘する 試合時に苦境に陥った時のふるまい方を見る 社会に貢献できる人材を輩出する クラブのメンタリティーを育てる（規律など） 我々のクラブは個人よりもチームで動くことの方が多いため
		クラブを通じて人材を育成する	心を寄り添いながら、クラブを通じて人材を磨き上げること
	U18以上の環境に 対する考え方	他チームの方が魅力がある	他チームに魅力がある 中心選手の流出による連鎖反応 スタッフ陣に力がないことかもしれないが精神論に近い トップチームがそこまで強くない トップチームの志向するサッカーに共感できていない 自分のチームでサッカーをしたいと思わせられるかが大事
		内部：外部のトップチーム昇格は10:0	トップチームの昇格は内部者が多い トップチームの昇格は全体で〇人くらい 他のチームに直接行くことはない
		トップチームとのギャップはある	練習参加や公式戦を行って差を埋めようとしている トップチームとの差を埋めるためのパスウェイを設定して実施する クラブごとにその子の将来性を意識して取り組んでいる 個人の成長プランを作成する 個人差が大きく、それぞれのプランを作成することは難しい 成長スピードの差が大きく、個人のプランを作成することは難しい
	U15育成（環境）に 対する考え方	野生児のような選手の発掘	野生児のような選手を取ろうとしている 野性的な選手は外部の方が多い
		選手を育てるだけでなく勝利も必要	選手を育てることを重視しても結果が出なければ選手は集まらない 勝ちを意識しながら、自身の目指すサッカーに取り組んでいるのかを常に振り返る 目指すサッカーを志向出ているかを指導者がジャッジしなければならない 身の丈に合った目標設定が必要

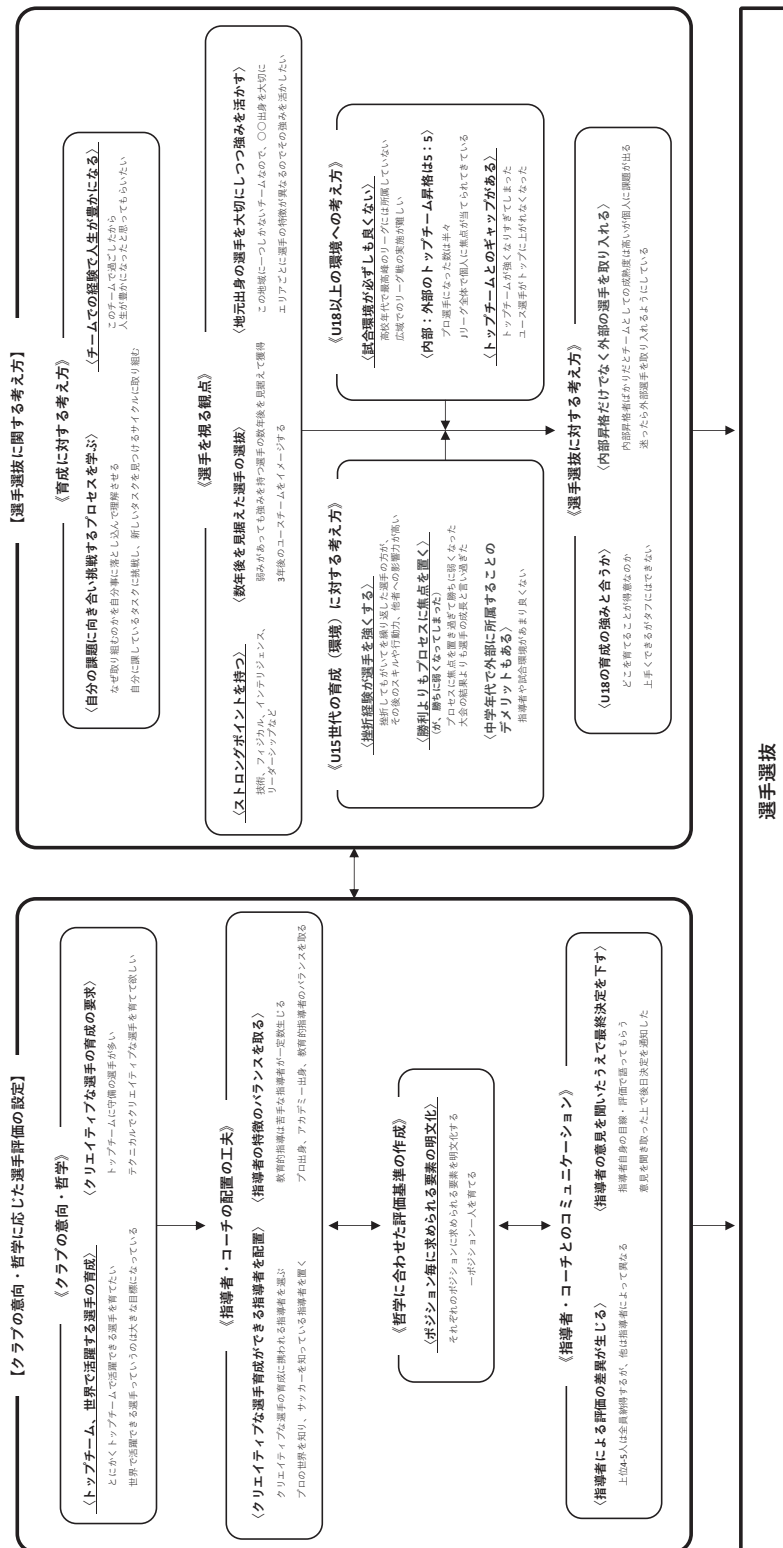


図3 Aクラブ (J1・政令指定都市) のU18選手選抜に対する考えのプロセス (下線は共通する内容を示す)

Ⅳ. 考察

本研究では、サッカーのJリーグクラブにおいて選手選抜の権限を有しているスタッフを対象に、ユースへの選抜（あるいは昇格）過程の実態解明のため、インタビュー調査を行い、選手選抜過程の一資料を得ることを目的とした。

選手選抜過程は、両対象クラブともおよそ同じ内容で取り組んでいた。Aクラブは、ジュニアユースが複数あるため、同じクラブに所属するジュニアユースからユースに昇格する選手（以下、「内部昇格選手」と略す）と他のジュニアユースあるいは中体連からユースに選抜される選手（以下、「外部選抜選手」と略す）をどのように融合させるかが課題である一方、Bクラブはジュニアユースが1つしかないため、内部昇格選手の状況に応じて外部選抜選手の獲得が変化することが課題であった。本研究の対象は、それぞれ地域や規模も大きく異なるクラブであったため、課題もそれに依りて異なっていたと推察される。選手選抜過程は、本研究の対象クラブ同様、大きく2つのプロセスに分類できると考えられる。1つ目は、Aクラブのようにジュニアユースを複数持ち、複数のジュニアユースからユースに昇格する選手を選抜するクラブと、2つ目はBクラブのように単独のジュニアユースからユースに昇格する選手を選抜するクラブである。本研究では、Jリーグクラブの中でどちらのプロセスが多いかは調査していないため、明示することはできないが、クラブのある地域の人口が多いこと、地域が大きいこと、予算規模が大きい等のクラブはAクラブと同様のプロセスである可能性が高いと考えられる。一方、地方クラブで、人口が少なく、予算規模が小さい等のクラブはBクラブと同様のプロセスである可能性が高いと考えられる。

次に、共通する要素（図3、4における下線部分参照）として、【クラブの意向・哲学に応じた選手評価の設定】では“トップチームに昇格する選手の輩出”、“ポジション毎の評価項目の設定”が挙げられた。また、【選手選抜に関する考え方】においては、“クラブを通じた人材育成”、“強み・特徴のある選手の重視”、“外部選手の特徴・彼らへの期待”、“勝利と育成のバランス”、“チームの環境面での不利”、“トップチームとのギャップ”が挙げられた。共通する要素は、選手の評価や育成に関するものであった。この理由として、Jリーグクラブにおける下部組織の目的が「育成」であることが考えられる。同年代である中体連、高体連所属のチームは、学校教育の一環として位置づけられており、「勝利」や「育成」を目指していることに間違いはないが、教育的側面も大きい。また、Jリーグクラブ以外のジュニアユース、ユースも、「勝利」や「育成」を目指していることは同様であるが、経営的側面もあり、より「勝利」やチームの存在価値に重点を置く必要があると考えられる。本研究ではJリーグクラブ以外を調査していないため、推測の域を出ないが、Jリーグクラブにとって「育成」というキーワードが大きなウエイトを占めることは明白であると考えられる。

一方で、要素して共通しているが異なる内容（小カテゴリー）としては、【選手選抜に関する考え方】において、“トップチームへの昇格割合”、“外部選抜選手のチームとの関係性”、“内部昇格選手の昇格に応じる人数”であった。特に、“外部選抜選手のチームとの関係性”について、Aクラブは育成組織として自らのチーム（に所属する指導者）の強みとの兼ね合いを考慮していたが、Bクラブはチームの方針と多少合わなくても外部選抜選手を受け入れざるを得ないことでチームの特徴と

合致しない場合もあった。その理由として、Aクラブは複数のジュニアユースを持っているため、Bクラブと比較して、より内部選抜の競争倍率が高いと考えられる。そのため、外部選抜選手を受け入れる人数は非常に少なく、自チームの方針に合致して外部選手を選抜することが可能である。一方、Bクラブは、単独のジュニアユースしか持っていないため、Aクラブと比較して、内部選抜の競争倍率は低いと考えられる。また、Bクラブ特有の事情として、県内に全国でも有名な強豪校が存在する、比較的近い地域にBクラブよりも規模の大きいJリーグクラブが存在するため、有望選手が他の高体連やクラブに流出してしまうことが挙げられる。そのため、Bクラブでは内部昇格選手のみでユースの人数を確保することが難しく、外部選手を一定数選抜する必要がある、Aクラブよりも外部選抜選手に依存することが大きいと推察される。

各クラブ独自の内容として、Aクラブはクラブの意向を踏まえ指導者の配置まで考えているが、Bクラブは人材不足からか現場の指導者がアカデミーダイレクター（ユースへの昇格・選抜の権限を有している役職）を兼務していた。この理由として、Aクラブはそのクラブの哲学（フィロソフィー）を選手選抜はもちろん、指導者の配置にまで浸透させることができる金銭的・人的余裕があり、バランスを取りながら育成に取り組んでいたことが推察される。一方、Bクラブはクラブの哲学を指導者の配置はもちろん、選手選抜（主に、競技レベルに関すること）においても十分に浸透させることが難しいため、“チームに対する思い”や“学校、家庭環境”など教育面、家庭環境に焦点を当て、競技レベルに関係すること以外で差別化を図っていると考えられる。

V. 結論

本研究では、ユースへの選抜（あるいは昇格）過程の解明のため、調査を行い、選手選抜過程を事例的に整理した。選手選抜過程において、多様な要素が抽出され、主に、クラブの哲学・意向に応じた選手評価の設定、選手選抜に関する考え方という2つの観点から選手選抜を捉えていることが明らかとなった。選手や指導者にとって、選手選抜の評価基準が明確になることは、高めるべき能力などが明確化されることにつながり、日々の実践現場での研鑽に大いに役立つと考えられる。一方、選手選抜の評価基準は選手の能力以外に起因することも示唆され、仮に選抜選抜されなかったとしても、それはクラブとのマッチングの問題の可能性もあるため、一概に選手の能力が低いというわけではないとも考えられる。本研究では、2クラブのみを対象としたため、事例的にしか選手選抜過程を示すことができなかった。そのため、より多くのクラブを調査し、個別事例から一般化できる共通性を見出し、さらには各クラブの特異性に触れることで、選手選抜過程の知見を蓄積していきたい。

文献

- ・ バングスボ・モア：長谷川裕ほか訳（2015）サッカー選手の体力測定と評価．大修館書店：東京， p.1.
- ・ 公益財団法人 日本サッカー協会技術委員会（2012）サッカー指導教本 2012JFA 公認C級コーチ．公益財団法人 日本サッカー協会：東京， p.27.
- ・ 日本サッカー協会（2023）トレセン概要.
https://www.jfa.jp/youth_development/national_tracen/,（参照日2024年1月19日）
- ・ 日本サッカー協会（2024）プロサッカー選手の契約、登録および移籍に関する規則.
<https://www.jfa.jp/documents/pdf/basic/br20.pdf>,（参照日2024年1月22日）
- ・ Ali A. (2011) Measuring soccer skill performance: a review. *Scand J Med Sci Sports*, 21(2): 170-83.
- ・ Drust B, Atkinson G, Reilly T. (2007) Future perspectives in the evaluation of the physiological demands of soccer. *Sports Med*, 37(9): 783-805.
- ・ Gil SM, Gil J, Ruiz F, Irazusta A, Irazusta J. (2007) Physiological and anthropometric characteristics of young soccer players according to their playing position: relevance for the selection process. *J Strength Cond Res*, 21(2): 438-45.
- ・ Ivarsson A, Kilhage-Persson A, Martindale R, Priestley D, Huijgen B, Ardern C, McCall A. (2020) Psychological factors and future performance of football players: A systematic review with meta-analysis. *J Sci Med Sport*, 23(4): 415-420.
- ・ Svenja Wachsmuth, Philip Feichtinger, Jessica Bartley & Oliver Höner (2023) Psychological characteristics and future success: A prospective study examining youth soccer players at different stages within the German talent development pathway. *Journal of Applied Sport Psychology*,
- ・ 田村達也・堀野博幸（2021）サッカー競技における体力的要因を用いた選手選抜方法の検討．*コーチング学研究*, 34（2）：115-123.
- ・ 北村勝朗・永山貴洋・齊藤茂（2005）優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？ 質的研究によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築．*スポーツ心理学研究*, 32：17 - 28.
- ・ 川喜田二郎（1967）．発想法—創造性開発のために．中公新書：東京.
- ・ 宇野耕司（2019）「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの対象者のニーズとプログラム目標の再検討．*目白大学心理学研究*, 15：1-15.